

●発行日：2018年2月17日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行：教材出版 学林舎



2018年教育の行き先 今後、求められる学力を考える

小学校では2020年度から、中学校では2021年度から、それぞれ新学習指導要領が全面実施となります。それに伴い、今後どういった学力が求められるのかを考えていきます。

まず、これからの時代に求められる人間のあり方としては、次のようなものがあげられます。

・自立した人間として、広い視野と深い知識、理想を実現しようとする志や意欲を持って、社会の激しい変化の中で何が重要かを主体的に判断できる人間であること。

・自分の考え等を根拠とともに説明し、議論等を通じて相手の考えを理解したり自分の考え方を広げたりし、多様な人々と協働していくことができる人間であること。

・自ら問いを立て、解決方法を探索し、計画を実行して解決に導き、新たな価値を創造し、さらに新たな問題の発見・解決につなげていくことのできる人間であること。

これらを踏まえ、育成すべき資質・能力については、以下の三要素が必要であると考えられます。

1：「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」

各教科に関する個別の知識や技能等です。基礎的・基本的な知識・技能を獲得しながら、既存の知識・技能と関連付けることにより、知識・技能の定着を図るとともに、社会で活用できる知識・技能として身に付けていくことが重要です。

2：「知っていること・できることをどう使うか

（思考力・判断力・表現力等）」

問題を発見し、解決方法を探して計画を立てて実行し、その問題解決のプロセスを振り返って次の問題の

発見や解決につなげていくこと（問題発見・解決）や、情報を他者と共有しながら、議論等を通じて互いの考え方を理解し、相手と協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）のために必要な思考力・判断力・表現力等です。

3：「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」

主体的に学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力です。また、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性に関するものも必要です。

以上の三要素を身に付けさせるためには、各教科における学習が必要不可欠になります。各教科における学習は、知識・技能のみならず、それぞれの体系に応じた思考力・判断力・表現力や情意・態度等を、それぞれの教科の特性に応じて育む役割を有しています。例えば、思考力は、国語や外国語において様々な資料から必要な情報を整理して自分の考えをまとめる過程、社会科において社会的な事象から見いだした課題や多様な考え方を多面的・多角的に考察して自分の考えをまとめていく過程、数学において事象を数学的に捉えて問題を設定し、解決の構想を立てて考察していく過程、理科において自然の事象を目的意識を持って観察・実験し、科学的に探究する過程などを通じて育まれていきます。このように、今後求められる学力とは、各教科における学習を通じて、自ら学び、判断し、自分の考えを持って他者と話し合うことで、より良い解決方法や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見つけ出すことができる力であると考えられます。

（文／学林舎編集部）

2018年学習の行き先 準備する大切さを考える

学力が伸び悩んでいる子どもたちは少なくありませんが、一体何が原因なのでしょう。その原因のひとつに「準備不足」が挙げられます。ただ漠然と「成績を上げよう」「勉強しよう」と意気込んでも、その筋道が正しくなければあまりうまくいきません。今回は、学習のために何を準備し、どのようなタイムマネジメントをしていけばよいか、その一例を紹介します。

■学習のための準備

学習を始める前には、以下の3つの準備をする必要があります。ここでは、具体的に「定期テスト対策」を例にとって解説していきます。

(1) 目標を決める

まず、目標を決めます。目標の内容によって「やるべきこと」、そして「やるべきことにかかる時間」がイメージできるからです。目標は、「次の定期テストで平均70点をとる」など、具体的に決めることが大切です。そして、その目標を見つけるためには、自分が今どのような状況にあり、どうなりたいのかを分析することが必要です。

(2) 目標を達成するためにやるべきことをリスト化する

目標が決まったら、目標を達成するためにやるべきことをリスト化します。「次の定期テストで平均70点をとるためには、苦手な数学を前回より20点上げなければならないので、出題範囲のワークを2回は解き直す」といったように、各教科、テスト本番までにやるべきことを書き出して、TO DO リストを作成しましょう。

(3) 長期スケジュールと短期スケジュールを立てる

次にスケジュールを立てます。ここで大切なのは、長期スケジュールと短期スケジュールの2種類を立てるということです。長期スケジュールとは、「定期テスト2週間前から勉強を開始し、1週間前には基礎学習を終え、最後の3日間で模擬演習をする」といったような、おおまかなスケジュールのことです。(2)で作成したTO DO リストを参照しながら、学習の開始時

期と、大きな流れを決めます。短期スケジュールとは、「今日は数学のワーク p.20～p.28 と英語のワーク p.35～p.40 をする」といったような、1日単位で具体的に何をするかを定めたスケジュールのことです。

■有効なタイムマネジメント

タイムマネジメントとは、単にスケジュールをこなすということではありません。いかに効果的に目標に向かってものごとを実行するか、というプロセスが重要です。

(1) TO DO リストは可能な限り具体的に作る

やるべきことをTO DO リストに書き出す際、可能な限り具体的に記入します。「数学を勉強する」ではなく、「数学の p.20～p.28 まで問題を解く」「その答え合わせをする」「間違えた問題を解き直す」といったように、作業内容を明確にします。また、その作業が終わったら、「できた項目に○をつける」など、終わったことを実感できるような作業を取り入れることで、達成感を味わえます。

(2) 時間制限つきのスケジュールを立てる

短期スケジュールを立てるときに大切なことがあります。それは「時間に制限を設けること」です。「今日は数学を2時間、英語を1時間勉強する」といったように、具体的にやるタスクをもとに目標時間を設定しましょう。時間の制限を設けずに進めると、途中で集中力が切れてしまい、結果として無意味に時間だけが過ぎてしまうことが多いからです。終わりの時間がはっきりすると、その時間までに終わらせようと集中力が増し、効率的な学習ができます。ただし、時間に囚われすぎないように気をつけましょう。

■まとめ

ここまで、学習のための準備とタイムマネジメント方法について紹介してきましたが、これらは、何も学生時代の勉強に限ったことではありません。国際化が進む現代では、「自分で考え、自分で行動する」人材が求められています。自身を律するためにも、自分なりの準備やタイムマネジメント方法を確立していきましょう。(文/学林舎編集部)

2018年教育の行き先 自己評価について考える

文部科学省が発表した新学習指導要領では、今後の学習現場においては、児童や生徒が自己評価を高めて学習していく必要があると述べています。自己評価とは、自分自身で自分についての評価を行うことです。自己評価によって、自分のよいところや可能性に気づき、児童や生徒が主体的に学習に取り組む意欲を高めることができます。しかし、現在の学習現場では、児童や生徒が自己評価できる状況が確立されていません。その理由はおもに2つあると考えます。

まず1つ目は、近年のインターネットやSNSの急速な普及です。ブログやツイッター、フェイスブック、インスタグラムなどによって、だれでも気軽に自分の意見や考えを不特定多数の人々に伝えることができるようになりました。しかしそれと同時に、自分の意見や考えを不特定多数の人々から批判・非難されることも多くなりました。そのような状況のなか、わたしたちは他人や世間の目に過敏になり、自己の評価よりも他者からの評価を重視する傾向があるのではないのでしょうか。最近話題になっている「インスタ映え」も、他者からより良く思われたい願望によるものです。特にインターネットやSNSが当たり前のように生活の一部になっている若い世代には、この傾向が顕著に表れています。このような状況では、自己評価を行い、また自己評価を高めることはきびしいと考えます。

2つ目は、学習現場における先生の自己評価の経験が乏しいことです。先生たちが児童や生徒のころは、自分ではなく先生の評価が絶対であり、通知表の5段階評価や10段階評価も他者と比較して判断されることがほとんどでした。そのような環境のなかで育った先生たちも、自己評価の方法がわからず、実は戸惑っていると思われます。自己評価の方法がわからない児童や生徒を、先生が導いてあげることができないのが現状です。

この2つの理由によって、現在の学習現場では、児童や生徒が自己評価できる状況を確立することができないと考えられます。それでは、どうすれば児童や生

徒が自己評価できるようになるのか、その解決策として次の方法を提案します。

○先生が自己評価するようすを、児童や生徒に見せる

児童や生徒が自己評価できるようになるには、まずは手本を見せたほうがよいでしょう。先生たちが自己評価する力を身につければ、児童や生徒にも教えることができますし、「先生もやっているから大丈夫」と安心感をあたえることができます。

○児童や生徒の意見を肯定する

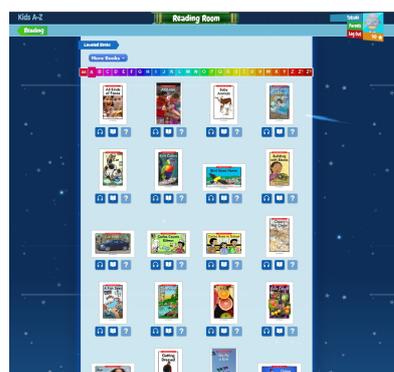
児童や生徒は、自分の意見や考えが他者から否定されることをおそれているので、先生が児童や生徒の意見や考えを肯定してあげることが重要です。例えば、児童や生徒が自分の意見や考えを発表したとき、先生は否定するのではなく、いったんできるだけ肯定し、そのあとにアドバイスをふくめた改善点などを伝えてあげれば、児童や生徒が他者の評価を気にせずに、自分の意見や考えをもちやすくなります。

(文/学林舎編集部)

注目教材

Raz-Kids

「Raz-Kids」は、学校・教室側が生徒に提供する ebooks（電子書籍）です。レベル別、分野別に選択された400冊以上の電子書籍の音声を聞きながら、読むことができます。音声部分がハイライト表示されますので、理解度も高まります。Reading A-Z とあわせて (Raz-Plus) 使用していただくと、ebooks の数が400冊から2000冊以上にまで増えます。



iPad、Android、Kindle Fireのタブレット端末にRaz-Kidsの無料アプリをダウンロードすることができます。



クロスロード Crossroad

第78回 文／吉田 良治

平昌オリンピック日本人選手 メダル第一号から学ぶ人間力

今月は韓国の平昌で冬季オリンピックが開催されています。連日世界中のトップアスリートの熱戦が伝えられている中、日本人メダル第一号はスキー・男子モーグルの原大智選手の銅メダル獲得でした。これまで世界の大きな舞台上、目立った活躍がなかった原選手には、本番のオリンピックで努力の成果を発揮する大きな力を備えていました。朝日新聞の報道によると、原選手は中学を卒業後単身カナダに留学し、モーグルの技を磨いたとのこと。但し、地元の高校にも通ってまじめに学業にも取り組んだそうです。親元を離れ、言葉の通じない国で一人生きていくことは、中学を卒業したばかりの若者にとって、大変ご苦労が多かったことでしょう。

昨年読売新聞がフロリダ大学に留学経験のあるプロゴルファー東尾理子氏を取材し、アメリカの大学へ留学する日本の若いアスリートの特集記事で取り上げました。この記事で東尾氏の経験として取り上げられたことは、『授業や予習・復習の合間にゴルフの練習の毎日、“これを乗り越えたら、人生で怖いものはない！”』でした。入学後最初の試験でスポーツ参加基準の学業成績を下回ると、練習などのチーム活動に参加できなくなり、それ以降必死で勉強をしたそうです。結局卒業まで勉強が主、ゴルフは息抜きになった！とのこと。さらに学業とゴルフ両方で成績優秀賞を獲得するなど、文武両道で実績を上げられました。“おかげで自分の中に芯が一本通った！”で記事が締めくくられていました。

原選手は“人生で一番苦しい時間”“技術もメンタ

ルも、カナダですごく強くなれた。15歳の決断は間違っていなかった”と、カナダでの高校生活とスキーの両立を振り返り、東尾さん同様人間力の芯が大きな役割を果たしたといえます。

<https://www.asahi.com/articles/ASL2D7F90L2DUTQP033.html>

<渋谷生まれ、世界驚かせた原大智 カナダでつかんだ確信 朝日新聞デジタル版より>

今月は朝日新聞で体育会系大学スポーツに対する厳しい内容の特集記事もありました。記事のタイトルが“(耕論)体育会、生きづらい？岡崎仁美さん、為末大さん、荒井弘和さん”、就職関連の大手リクルートの関係者、元トップアスリート、そしてスポーツ心理学の専門家などへのインタビューで構成されています。

https://www.asahi.com/articles/DA3S13353240.html?iref=pc_ss_date

体育会系が新卒採用で優遇される時代はもう過去の話、スポーツ偏重ではこれからの厳しい時代に打ち勝つことはできない！封建的な体育会系の風土が生み出す“イエスマン”なら、AIに人の仕事が奪われる時代、真っ先に切り捨てられてしまいます。また社会のブラック問題やパワハラといった人権問題の温床となる！そしてスポーツをしてきたら精神的に鍛えられるのはうそ、むしろアスリートの方が撃たれ弱い！それぞれの専門家の鋭い指摘は、これまでスポーツをしていたら、社会で生きる上でいろいろと有利！といわれた時代ではなくなっている、いやむしろスポーツの経験だけでは“生きづらい”時代になっているのでしょう。

今年は初夏にロシアでサッカーの世界カップがあり、来年はラグビーの世界カップが日本で開催、そして2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。日本の関係する世界的なスポーツイベントが目白押し、メディアも連日日本選手の活躍を報道しますが、我々が目にするのはトップ中のトップアスリートのみです。スポーツが社会の中でどう価値を示すのか、メダルの数で測るのではなく“競技力は人間力の上に宿る！”アスリートの前に一人の人間としてどうあるべきか、人間の土台となる人間力をいかにして高めるのか、日本のスポーツ界はアスリートの人間力向上の環境を整えることが重要となります。(つづく)